

## おわりに

大東亜戦争における戦勝国は、東京裁判を開いて日本一国だけに責任を押し付け、日本一国だけを断罪しました。

そして、アメリカのGHQが中心になって6年8ヶ月にわたり、言論統制を行ったため、その間は戦勝国の主張に反論することは困難であったと言えましょう。しかしながら、サンフランシスコ講和条約発行後、GHQによって押し付けられた日本国憲法をはじめとする多くの法令等を独立国家として見直すべきであったのです。

いずれにしても、晴れて日本の独立が認められたとき、東京裁判を含む占領政策を遂行してきた米国は講和し、日本が独立した後も米国の「審判」に従った判決の刑の執行を日本政府に要求した講和条約第11条については、その条項の不当性を認識しつつも、この11条に基づき、国会において「日本に戦争犯罪人はいない」ことが決議されました。ところが、時間がたつにつれて、以前に国会決議されたものが無視され、現在に至っては、日本の多くの政治家、知識人やマスコミが、「A級戦犯」なるものを軽々に発言したり、大東亜戦争における日本の悪玉論から脱却できないでいるのです。

東京裁判については、この裁判の無効性を終始主張したパール判事が、国際法学会から完全に支持されているだけでなく、この裁判の裁判長であったウエップ（オーストラリア代表）は帰国後、「東京裁判は誤りであった」と告白、主席検事だったキーナン（アメリカ代表）も「東京裁判はいくつかの重大な誤判を含んでいるだけでなく、全体として復讐の感情に駆られた不公正な裁判だった」と告白しており、とりわけこの裁判の最高責任者であったマッカーサー自身が、昭和25年10月にウェーキ島でトルーマン大統領と会談した際、「東京裁判は間違いであった」と述べているにもかかわらず、なぜ日本は自虐史観の呪縛から脱却できないのでしょうか。

本書は、特に明治以降の日本の歩み、戦争にかかわる日本人の行動を中心として考察してきましたが、戦前、戦中の人々は、日本人としての誇りが高く、祖国を誇りに思い、教育勅語や軍人勅諭に象徴されているように、モラルが高かったのです。日露戦争における乃木大将たちの武士道精神、捕虜に対する配慮を見るならば、大東亜戦争における戦勝国の行動と比べ、同じ戦勝国として、どちらがより文明国家であり、法治国家であり、そして品格ある道義国家であるといえるのか。

日本が大東亜戦争で支払った代償は、東京裁判による国家への汚辱と歴史の偽造、ABC級戦犯裁判による不当な大量の刑死者、原爆投下・本土無差別空襲による非戦闘員大虐殺、民間避難民に対する暴行陵辱、捕虜に対する虐待と枚挙にいとまがありません。日本がこれらの犠牲を負い、代償を支払ったにもかかわらず、戦勝連合国は自らの戦争犯罪について、反省のかけらも示していないのです。

インドのパール判事が、戦後來日して、「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しませぬから」という原爆の碑を見て慨嘆しました。「主語は誰か、非戦闘員無差別殺戮という人類史上の大罪を犯したのはアメリカではないか。」あたかも日本側に罪あり、というのが如き自虐的な碑文を見て、アジア開放に貢献した近現代日本の歴史の光の部分が高く評価する博士は、敬愛する日本が誇り

を失った姿を嘆いたのであります。

大東亜戦争は、大東亜宣言に述べられていたように、まさに日本にとって自存自衛のための止むを得ざる戦争であったのであり、かつ、米英に対しては植民地の解放、人種の平等、そして、共存共栄をうながすという世界を改革するための戦争であったのです。あの「戦争論」で有名なクラウゼビッツが、「戦争とは他の手段をもってする政治の継続である」と言っていますが、日本は大東亜戦争開戦前、「四方（よも）の海 みな同胞（はらから）と 思う世に など波風の 立ちさわぐらむ」を詠まれた平和を願う昭和天皇の御心に反し、戦いを余儀なくされ、結果的に戦闘には負けましたが、その政治目的を達成することができたのであります。

そして、戦闘に勝った米英は戦後植民地を失い、さらに、植民地を中核としたブロック経済を止め、共存共栄による自由貿易主義をとらざるを得なくなったのです。

人種差別の廃止については、米国はこれをなくすることによって、米国における黒人の人達は、様々な分野で活躍することができるようになり、米国を力強く成長させたと言えます。特に 2009 年には米国で初めて黒人の大統領が選出され、今や米国史上、初めて二期目の黒人の大統領が存在するという画期的な時代が到来し、また近年では国務長官という要職にパウエルやライスが登用されておりますが、60 年前では考えられなかったことが今米国で起きているのであります。まさに、人種差別の完全なる廃止は、日本が 1919 年にパリで提唱して以来 90 年の年月をかけて、米国に黒人の大統領が誕生することによって、その目的が真に達成されたといえるのではないのでしょうか。

そして、我々日本人は、国のために尊い命を捧げた英霊のお蔭で、今日、世界の歴史が大きく進歩した中であって、日本は戦後 60 年以上にわたって、他国と戦火を交えることなく、平和で豊かな生活を営むことが出来たことに思いを致すべきなのです。

戦後の歪められた歴史教育を改め、日本再建の展望を確かにするためには、歴史の偽造を打破しつつ、特に日本が歩んできた近現代日本の歴史を誇りに思い、日本人としての誇りを取り戻すことが、今、何よりも日本に求められているのです。